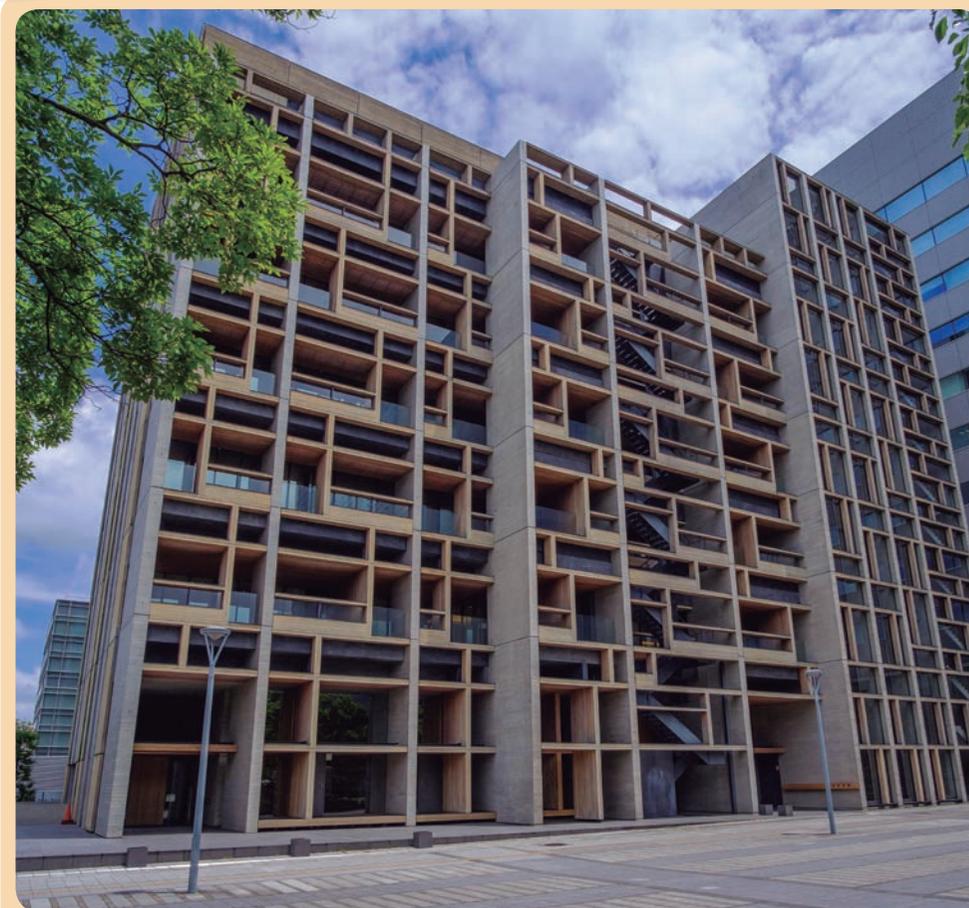


唯一無三のデザインで
「木の街」からその文化と魅力を発信



東京湾に面した新木場の駅。その構内からもよく見える外観は、組子のようでもあり、また「パズルゲーム」「トリス」の世界のようにも見える不思議な建物だ。

総量1000立方メートル、大型トラックにして100台分以上の材木が外観、内装、構造にも多用される。木の持ち味や香りを大切にするため、使われるのは無垢材。効果は明確で、中に入ると天然木の良い香りに包まれ心地良い。

銘木を使わず、全国で伐採された規格材の組み合わせにより構成され、都市の中において建築に木材を使うことへの限界に挑戦しているという。特徴的なのが最上階にある大ホール。300人収容というその天井は、24メートルほどの長さがあるにもかかわらず、無柱。この大梁は規格材の檜の角材を接着剤なしの伝統工法によってつなぎ合わせ、長い梁を生み出した。建物自体は鉄筋コンクリートだが、この天井だけは木構造、大胆な造りで見応えがある。

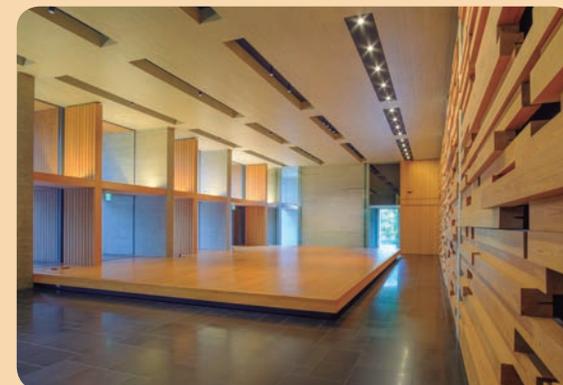
コンクリート打ち放しと角材を組み合わせた西側壁面。経年によりそれぞれの素材の色が近寄り、融合が生まれ、時間経過とともに古びの美しさ加わる。複雑ながらも規則性あるデザインで、立体感を生み出している。

檜材を使ったステージは、文字通り「檜舞台」。角材をランダムに組み陰影を生み出した壁が美しい。くつろぎのあるギャラリーで、過去には展示会の他、落語会なども行われてきた。



西側デッキに使われる木材は水に強い檜材。コンクリート部分は規格サイズの杉の型枠に流し込み、表面に木目を付け、統一性をもたらしている。

懇親会などの会場として設計された小ホール。演出後方に杉の木立をイメージした並木が表現される。一般的な材木、杉の小割を使ったシンプルな構造。



竣工: 2009(平成21)年
設計: 日建設計(山梨知彦)
住所: 東京都江東区新木場1-18-8

所有者の東京木材問屋協同組合は、深川から12年前に当地に移転。木材需要拡大などを目的に、都会では珍しく木材を多用したビルを建てた。木材は全て国産で、外装、内装だけでなく構造にも及ぶ。地上7階、地下1階。

ふんだんに木が使われた会議室や和室、さらには茶室もあり、レンタルも可。歴史上、木の文化と親しんできた日本人が、その質感や温もり、自然素材の優しさや懐かしさを感じられる、他に類を見ないビルである。

